

東洋の星物語

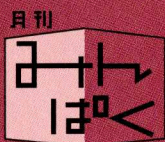
渡部 潤一

わたなべ じゅんいち / 1960年福島県生まれ。天文学者。東京大学を経て、現在、自然科学研究機構国立天文台および総合研究大学院大学准教授、広報室長。理学博士。研究の傍ら、講演、執筆、メディア出演などで活躍。『新しい太陽系』（新潮社）、『太陽系の果てを探る』（東大出版）、『星の地図館』（小学館）など著書多数。

天文学者というと、数学と物理学の世界に浸る、完全な理系人間と思われるが、なかにはわたしのような変わり者もいる。少年時代は、近くの畑で石器や土器を掘るのに夢中だったし、今でもキトラ古墳の壁画が公開されるなどと聞けば、休みを取って駆けつける、いってみれば考古学ファンに属する。大学の教養時代の選択科目で「民族学」のゼミをとったなどという天文学者は、希少種のはずである。もちろん現在では、宇宙にうかがふ天体の正体を探るのが仕事であるから、理系的な手法・見方で真実に迫っているのはいうまでもない。しかし、その一方で、宇宙観の変遷や世界中のさまざまな民族が星をどのように眺めてきたのか、ということにも、研究とまではいかないものの、今まで興味をもち続けている。

の見た方があり、独自の星座がつくられていた。そしてユニークな星の物語が紡がれ、語り継がれてきたのである。キトラ古墳の天井に描かれた星座は中国起源の星座だし、七夕伝説や中秋の名月なども東洋独自の伝承だ。日本でも中国星座を用いつつも、各地方独自の星座や星の名前が使われ、豊かな伝承が残されていたことが野尻抱影らの先人によつて明らかにされている。たとえば、冬に見えるオリオン座の三つ星をはさんで輝く白色の一等星リゲルと赤色の一等星ベテルギウス。このふたつを源氏と平家の旗の色に見立て、源氏星・平家星とよんでいたのは美濃地方であった。そんな民間伝承を、今でも拾い歩いている野の研究者がいるのは心強い。

二〇〇九年はガリレオ・ガリレイが夜空に望遠鏡を向けてから四〇〇年目の節目ということで、国連は「世界天文年」と定めた。これを機会に、あまり顧みられなかった東洋の星物語を集めてみよう、という企画も進んでいる。確かに夜空に輝く星の正体は、天文学的にはひとつであり、ユニバーサルに定義できる。しかし、その星をどのようにとらえ、どんな物語を紡ぎ出すかは自由であり、それぞれの地域や文化、そして暮らしを反映しているという点で、とても面白いと思っている。



目次

JULY 2008
月刊まんばく

7

01 エッセイ 世界へ世界から
東洋の星物語
渡部 潤一

02 特集 レコード

レコードが発展させた
音楽文化

福岡 正太

円筒と円盤の攻防

坂野 博之

レコードになった「映画説明」

今田 健太郎

08 モノ・グラフィ
穴があくほどものを見る
上羽 陽子

10 地球ミュージアム紀行
取ってつけたような…
ーシドニーのミュージアムから
川口 幸也

11 表紙モノ語り
黒タイの蚊帳
櫻永 真佐夫

12 まんばくインフォメーション

14 万国津々浦々
サトウキビ産業のたそがれ
丹羽 典生

15 時論・新論・理想論
残存デンプン研究のススメ
渋谷 綾子

16 外国人として生きる
「ハーフ」であることに誇りをもつ、
100年に一人の「ミス・ブラジル日本」
アンジェロ・イシ

18 歳時世相篇
④雨安居
ラオスの若者が出家する理由
平井 京之介

20 生きもの博物誌
博物館の
いたずら虫たち①
園田 直子

22 フィールドで考える
本音の在りか
鈴木 紀

24 まんばく ウィークエンド・サロン
研究者と話そう
次月号予告・編集後記